

# ある小説家の悩み

大村伸一

私の書く小説は面白くない。家族はもともと読もうともしないし、少ない友人たちには私の方から読まないでくれと頼んでいる。つまらない小説を読んで時間を無駄にさせるのが辛いからだ。

それでも出版された本はもう十冊を越え、売れ行きは上々だと編集者も話していた。どうしてそんなに売れるのだろう。わけが分からないと訴えると、編集者はしかたのない奴だという顔を私に見せないようにしながら、時代が求めているのですよとなぐさめた。時代ってなんなんだと問い詰めようとして思い直した。隠そうともしないその見下したような顔を見れば編集者にも何も分かっていないのははっきりしていた。

四十歳になるまで私は小説などほとんど読まなかったし、こうして作家になってからも本を読むことはほとんどない。学校では授業で読まされたこともあったはずだが今では何を讀んだのかさえ覚えていない。印象に残ったエピソードのようなものも特になかった。作家のくせに本を読まないなんてと軽蔑されるのが嫌で何冊か読もうとしたことはあるが、意味がわからないか退屈で読み続けられなくなってすぐに放り出してしまう。何冊か試してみた後、本を読むのはやめてしまった。話を作る参考になるからせめてテレビドラマや映画くらいは見たほうが良いと勧められ観たこともあるが、数分で気分が悪くなってやめた。それに、最後まで観ても何の役にも立つはずのないことはすぐに分かった。

四十歳になるまで仕事では毎日たくさん文章を読んだ。部下や委託先から送られてくる無数の報告書を次々と読みこなし、上司や取引先へ送る報告書を書き続けた。読まなくてはならない報告書の文章にはいつも文法や表記に誤りがあり、その度に私の脳細胞が一つまたは塊で音をたてて弾けて消えてゆくのが分かった。勿論、報告書執筆マニュアルは社員や委託先の全員に配布されていて、どのように文章を書けばよいのか、どのように書かなくてはいけないのかは周知されているはずだったが、おそらくそのマニュアルを誰も読んでないのかもしれない。マニュアルは毎月改版されどの頁も細かい文字で隙間なく埋め尽くされ分厚く重く、おそらく丹念に読めば一年かかってもその半分も読めなかったはずだ。マニュアルは新しい版が印刷されるたび社員や委託先の全員に配達され届けられた本の重さで机が斜めに傾ぐ。

私が入社したばかりの頃は頁数も少なく文字も見分けられたので何度か読み通したそのマニュアルの文章は奇妙だった。数文字読み進むだけでその文章の話しかけている相手が次々と姿を変え、読み手はやがて自分が誰であるのか確信が持てなくなり、底知れぬ不安に押しつぶされてしまうだろうと思えた。その不安のために、そこに何が書かれているのかを理解しようとする意欲は消失し、絶望の中で必ずマニュアルを床に落とすはずだ。マニュアルはとりわけ重くつくられていて、通常は五分以上腕で支えられず、それ以上読み続け心が壊れることを防ぐように設計されていたが、その設計には欠陥があり、マニュアルを机の上においたままであれば机が崩壊するまで十分はかかり、それだけ時間があれば心が壊れてしまうには充分だった。

私は何十年もその仕事を続けた。その仕事を続ければやがて精神が冒され自分が壊れてしまうだろうと思えた。だから自分を守るために二つのことをした。一つ目は、意味不明の報告書を読み細胞が破壊され脳に隙間ができると、上着の内ポケットにいつも持ち歩いている白地のノートに報告書では書かないことを書きつけること。ノートは一週間もすると一杯になったので、誰にも読まれない様に給湯室で燃やし、文房具店で新しいノートを手に入れた。ノートから上がる炎に自分の書いた文字が絡みつきながらよじれ、そして燃えてしまうのを見ると、脳の空洞にまた新しい細胞が生まれ隙間を埋めてゆくのを感じた。

二つ目は、マニュアルの読者カードに匿名でケーキのレシピを書いて送ること。それでマニュアルがケーキに変わるとまでは考えなかったが、そのアンケートを見て何かが変わればよいと思っていた。結局何も変わりはしなかったのだし、たとえ変わっていたとしてもどこが変わったかは分からなかっただろう。読者カードは年に四回送っていた。そして、三十年目にそのことを社内告発され弁明の機会もなく職を失った。

私の読書体験といえばそれだけであり、その体験の中で空想をするということは一切なかった。それでも作家になり、ある数を越えた読者に支えられているというのは不思議なことだ。想像力に欠ける私の小説を読み、実際に起こったことや実在の人物について書けば特別ありもしないことを想像しなくてもよいだろうと助言してくれた者もいたが、実際に起こったことであっても文章にするには想像力が必要なのであり、そういう意味では書かれてしまえばそれはもう現実に起きたことではなくなっているのだと私は考えたが、誰にもその考えを打ち明けはしなかった。想像力なしで文章を書くことは不可能だ。作家になって以来、私は幾度もそう確信してきた。そして、自分の書いた文章が小説として少しも面白くないのは想像力という肉を持たない観念という骨だけの文字列にすぎないからだ、私は考えていた。そう分かっている、私には自分に持ち合わせのない想像力を改めて手に入れることも

不可能だと思えた。

私の書く小説が面白くないということは私にはよく分かっていて、私は、私以外の誰かが書いた小説を読むこともドラマを観ることもなかったので、いったいどんな小説が面白いものなのかははっきりとした基準も、面白さの感覚も私にはなかった。ただ、少なくともあの、読み続けようとしてもそれに耐えられないほどの意味の分からなさや、心を絞りあげられるような退屈さが面白さには必要なのであり、どうしてもそれを自分のものにできなかったのだから、自分の書いているものが、面白いものであるわけがないことは承知していた。

編集者から紹介され会うことにしたその男は自分は私の読者だと言い、この店にはよく来るのですかと尋ねたが、そのカフェに入ったのはその時が初めてだったのでそう答えると、情報を理解するためだとしても言うように一瞬体の動きを止めて、再び口を動かし始めたときにはそんな質問などしなかったかのように、男は別の話を続けた。

「面白いとかつまらないとか、そういうことが重要じゃないですよ」

作者である私に対する敬意というものは微塵も感じられない。私に視線を合わせないように右を見たり左を見たり、テーブルの下を覗き込んだりしながらも、当たり前のことをわざわざ教えてやっているとこのだという気持ちははっきりと伝わる口調で男は話した。

「ほら、今、そこを通っていった女」

窓の外はいつの間にか雨になっていて、ブーツを履いた若い女が傘から雨をしたたらせながら歩いていったばかりだった。

「あれは、小説なんか読みません」

私は男が何を言いたいのか分からず、こっちに向けられている髪が薄くなった頭のつむじをじっと見ていた。

「知っていますか。日本の書く事に不自由な人の割合は赤ん坊をのぞいて99.99%以上です。もはやパーセントではなく実数で言うほうが直感的に理解しやすいのですが、三歳以上の人間で文章を書けないのは全人口の内わずか千二十一名です」

男の言葉は真実に思えたが、そうなるとその千名あまりの人間の氏名住所なども調査済みのだろうか。

「先生の書くものはよくわかりません」

突然、私のことを話し始めたので驚くと、いつの間にか男は私の目をじっと見つめていることに気づいた。目をそらさずにずっと見つめているので、それは失礼だと注意したほうがいいのかここは我慢して話を聞いたほうがいいのかと考えていると私をみつめたまま男は続けた。

「日本語としてはきちんと書かれていて、文章の意味ははっきり分かるんですが、他の小説と違って読者を誘っていない。面白くないんです。面白くない小説なんて小説の定義と矛盾してるじゃないですか」

語尾をすこしだけ上げて言うことで、それは自分の判断ではなく疑問なのだから失礼なように聞こえるかもしれないけれど、質問なのだから失礼なのは私ではないのです、私に対して怒るとそのほうが失礼なんですよ、だから怒ってはいけませんと言いつづけている。勿論、質問というものは一度はその考えを肯定してから確認するというものでしかないのに、男がそう考えていることははっきりしているのだが、そもそも自分の書くものがつまらないということはよく分かっているのだから、私は男の言葉の先を聞きたいと思った。つまらないものであれば誰も読まずにいてくれればそれでよいとも思っていた。無理に読むから、つまらないということを改めて言葉にしなければならなくなる。それにしても男の言う「小説の定義」とは何だろうか。「小説」は「面白い文章の集まり」といったことを工業規格か何かで定義しているのだろうか。

「たまにいるんですよね。そういう作家が。でも数は少ない。だから、たまに読むと新しく感じられて、それでついつい読んでしまう」

小説の定義がどこにあるのかについてつまびらかにされなかったのが、私は少し失望した。「読んでしまってから、面白くなさが面白い、なんてことを考えはするんだけど、それはまあ、読者としての言い訳みたいなものです」

この男は私に、私の小説がつまらないということを言いにもわざわざ七時間もかけてやってきたのだろうか。

「言い訳すべきなのは、作者の方なのに」

男は私に謝罪を求めていたのかも知れない。それとも彼もまた作家になることを願い、そのために私を追い込んで作家を辞職させ、そして空いた作家の椅子に自分が座ろうとでもいうような計画を持っていたのかもしれない。男が言い訳の事を話し始めたのは、それとなくこういったことのすべてに責任のあるのは私の方なのだと感じさせようというあからさまな行為だと思えなくもなかった。彼が険しい顔のまま急に立ち上がったので、私に暴力をふるおうとしているのではないかと思いあわてて、残念ながら私は外出するときは小説家免許は持ち歩かないことにしている、と彼の暴力は無駄だということをほのめかしたら、男はくすくすと笑い、失礼と言って席を離れ店の奥の化粧室に向った。

私の小説を読んでいる人たちの録画がある。机やテーブルに向かって座り、本を手渡されるところから始まるそのビデオは、最近の百名分を閲覧できるが、どれもほとんど同じだ。本を渡されるのは、緊張した様子で説明を聞いている若いスーツ姿の男や、既に地位に着いてい

るらしい高級そうな服を着た男はなんでもないという顔をしてはいるが、本当は状況を把握できずに言われるがままだ。水商売の女将なのか着物姿で無表情な老女、赤ん坊を交換に本を受け取り不安そうな中年の女（本に集中できるように、子供を預かってくれるらしい）。見たことのあるどこかの高校の青色の制服を着た娘はこの撮影のあと渡されるギャラの金額に変更がないことを何度も確かめていたし、小学校にあがったばかりで果たして小説を読めるのかも怪しそうな少女など、様々だった。様々だったが本を手にしてからの反応は同じだった。まず受け取って表紙の題名を読むとあくびをする。それから本を開き、目次を見て眠そうな顔になり、本文を読み始めると一頁も進まない間に頭をがっくりと落とし深い眠りにつく。編集者がその録画を見たとき、何か嬉しそうな感情を隠さないまま「これって兵器ですよ」というようなことを言った。調べてみると昔、読むと死んでしまう文章というものがあり、実際に戦争でそれが使用され我が国は敗戦国となった。私の小説は眠らせるだけだが、眠っている敵もまた簡単に制圧できるだろう。

だが、もしそうならあるはずの軍からの連絡はなかった。それを聞いて面白がった編集者が調べたのだが、私の小説を日本語以外の言語に翻訳してしまうと、その嗜眠効果は失われたあの退屈な文章の集合体になってしまうらしい。私には外国語は分からないのでその真偽は確かめられないし、そもそも自分の書いたものを読んでも、私自身は眠くなどならないので、兵器としての効果も判断し難かった。

とはいえ、日本語でしか効果がないとしても、それを読んだ人間が確実に眠ってしまうのなら、軍は防衛の名目で私の小説を管理または抹殺しようとするのに違いない。あるいは、文章を読むという行為から眠りに至るプロセスをもっと詳細に研究しやはり兵器として利用しようと計画してもおかしくはない。こうして何冊も新作を上梓しながら軍から何の連絡もないのは、私の小説にそんな力がないからだろう。とすれば、あの録画自体が作り物なのであり、そのような捏造に主謀者ではないにしてもあの編集者が関わっていることは間違いないところだ。

私の席の向かいには若い女が座っていた。薄くした化粧の顔は微かに口の端を引いて、たぶん微笑を浮かべて私を見つめている。紹介されたのは男がひとりだけだったから、彼女は男が席を外した隙を狙ってそこに座ったのかもしれない。服の腕の部分が濡れて肌に張り付き寒そうに見えるから、気がつかなかったけれど彼女は新しい客で相席になったのかもしれない。ただ、他の席はみな空いているので相席が必要だとは思えなかったから、約束をしていないようですがと思うと言うと女は嬉しそうに笑う。

「これ書いたんでしょ」

そう言ってテーブルの下から取り出したのは、先月発売された私の新刊だった。表紙には何の絵もなく題名さえ印刷されていない。それで売れるのですかと編集者に尋ねると、先生の

ご本の場合は表紙にどれだけ金をかけようと売り上げにはまったく影響がないんですよ、と いつもと違い慇懃でありながらさも嬉しそうに言った。それが、あまりにもよく売れるので表紙など何でもよいという意味なのか、表紙にいくら工夫をしてもそれで売り上げが増えるということはないという意味なのかは分からなかった。表紙に作者名を印刷しないということは、他の作者の本と間違えて買われることを狙っていたのかもしれない。出版社の販売戦略は何度説明されても理解できない。何か私の書いたものとは無関係な事象が生起している。

「書いた人を見つけるの、大変だったのよ」

その本が完成してから私の手許には一冊も送られて来なかったので知らなかったのだが、表紙だけでなく本文にも題名はおろか作者名さえなかったようだ。もしもそうだとすると、小説自体も印刷されていなかったということも考えられる。もしそうなら、それは

「ただのノートじゃない」

想像は的中したようだ。確かめようとその本に手を伸ばすと、女は私よりも素早く本をテーブルの下に隠し、本のあった空間に伸ばされた私の手を面白いものを見るように楽しそうに眺める。

「あら、取り戻したいの？ でもこの本は私の所有物。それともまだ見た事がないのかしら」私は失礼な振る舞いをしたことを謝罪し、よろしければその本を見せていただけないだろうかと言った。もしかすると、その本は私の本ではなくもともとただのノートだったのかもしれない。

「印刷されていない小説を読むのって、かなり大変なのよ」

女がおかしなことを言い始めたので気づいたが、そもそも何も印刷されていない小説を読むことなどできないはずだ。それでどうして作者を探し当てようなどと考えつくだろうか。

「短編集だということが分かるまで二日もかかったのよ。でも、それが分かればあとは簡単だった」

私は今まで長編小説など書いた事がないのだから、二日もそれに気づかないなどということがあつものだろうか。印刷されていない本を読んだと言っているようにも聞こえたが、雑誌に掲載した短編をまとめた本であれば、読むことはできたかもしれない。

「雑誌に掲載された小説は、雑誌を参考にしながら読んだわ。でも、最後のひとつが書き下ろしだったでしょ。退屈な小説を読むのは眠くなるけど、退屈だとしか分からない印刷もされていない小説を読むのは、それはちょっと楽しかった。クロスワードパズルみたいな楽しみかな」

女はそう言いながらくすくす笑い、私を試すように見つめた。私がどこまで女の話に調子を合わせるか、それを確かめようとしているのかもしれない。小説の最後に起こる事件について、どう思うかと尋ねると女は少し失望したように視線を落とした。

「それが聞きたいのなら、印税の半分をもらわなくちゃ」

それからうつむいたまま女はささやくような声で何故印税を受け取る権利があるのかを、息継ぎもしないでしゃべり続けた。やがて言葉は明確になり他の席でも聞こえそうなほど大きな声になった。何もないところからひとつの作品を読んだのだから、自分にも印税をもらう権利がある。もしそれが作者の意図した話でないならそれは作者がそのような作品を発表したことにこそ責任がある。その空白からひとつの物語を読み取ったという行為には対価が支払わなければならない。聞いているうちに女の声に男の低い声が唱和し始め、同じ言葉を一言も間違えず二つの声が話し続けその言葉には終わりが無いのではないかと思えた。女の声が途絶えると男の声は自分を弁護士だと自己紹介し、著作権や漁業行使権、あるいは空間分割権に関する法令や法文を引用しつつ、女の正当な権利として私がこれまで得ていた印税の七十%を支払う必要があると言った。テーブルに男の声で話をしている者の姿は見えなかった。人に憑依する悪徳弁護士がいるという噂を聞いた事はあったが、実在するとは思わなかった。

すぐにでも小説家協会に連絡し、弁護士を派遣してもらわなくてはならないと思いながら、私は女の主張にも一理があることは分かっていた。何も印刷されていないただのノートを本として売りつけられ、その内容まで自分で考えさせられたのだ。しかし、私の書いた小説を印刷し忘れただけでなく、そのことに誰も気づかず書店に送ってしまうとは、訴訟を受けなくてはならないのは出版社の方ではないか。私は弁護士の話が終わったら、そう言おうと思って弁護士の話が終わるのを待っていた。

そこにはいない弁護士の話の終わりを待ちながらうつむいたままの女の頭部を見ていて気づいたのだが、この頭丁の薄くなったつむじには見覚えがある。それは化粧室に立ったままいつまでも帰ってこないあの男の頭部だった。そうなるこの女は、あの男が女装して別人になりすましているだけなのではないだろうか。今までほっそりと痩せた肩であるとか、服の内側で息づく乳房であるとか、成熟した肉付きのよい腰であるとか思っていた女の肉体だったが、痩せた肩は窓から入るかすかな光のせいでそう見えているだけであり、乳房は呼吸とは違ったリズムで上下しているようだし、腰は豊かというより筋肉質で硬くスカートからのびている足は岩のごつごつして、どう見ても男子運動選手の足にしか見えず、どうして今までこれを女だと思っていたのかが全く分からない。

「そんなに見つめられたら、訴えますわ」

もう男であることを隠そうともせず低く歯切れの悪い声でそう言うと、男の汗に混る蟹や蝦の死骸の腐ったにおいがテーブル越しに漂ってきて、私は目の前のコップを手に取り半分ほど残っていた水をすべて飲み干した。

「人間にとって水と小説とどちらが重要なのか、知っていますか」

俯いていた顔をあげるとさっきまで女にしか見えなかったその顔は元の男の顔に戻っていた。付け睫毛が剥がれ汗に滲んで目の周囲が黒い絵の具を垂らしたようになっていたが、男は気にもせず私の答えを待つ事もなく話し続けた。

「そうです。こんな質問にはわざわざ答える必要もないほど答えは明瞭です。先生がそれを理解しているという発見は、失礼ながら私には驚きでしたが、少なくとも議論を始める出発点にはなるでしょう」

女のような姿をしていた男の顔からはメイクが消え、服装も変わっていった。それは手品のようなものですかと聞いたかったのだが、そんな質問はあまりにも失礼に思えたので口にはできなかつた。

「人間の体を構成するほぼ六十兆の細胞にはすべて読書が必要です。しかし、一人の人間のために六十兆冊もの本を用意することは禁じられていて、そのかわり一人に一冊の本が与えられます。我々のような生物は水がなければ死んでしまいますが、人間は本がなければ人間ではなくなってしまうのです」

男の意味の分からない理論にはなんの根拠もなく集中して聞き続けることは難しかった。ただ男の言った「我々のような生物」に私も含まれるのかどうかが気になって、意識を失いそうになりながらも男の言葉を聞きつづけていた。六十兆の細胞が小説を必要とするのなら、地上に存在する本などすぐに尽きてしまいほとんどの細胞が読書に飢えて命を終わらせてしまうだろう。ああ、それが死というものなのだろうか。そこまで考えたとき、男が話を中断しテーブルの端を握りしめて息を詰め目をきつく閉じ何か苦しみに耐えているように見えた。あれほど汗をかいていたのは、この苦しみの前兆だったのだろうか誰かを呼ぶべきだろうか様子を見るべきだろうかと迷っていると、男の体がふくれはじめた。顔は相撲取りのように腫れ、服の中いっぱい体が詰まったようになり、ズボンのベルトにしぼられた体は上下の二つの丸いボールが腰の部分でかろうじて繋がっているだけのように見え、袖口から伸びる手首も手のひらも空気をいっぱい吹き込まれた風船のように見えた。男の額の部分の皮が引きつり薄くなるとその内側に何か別のものが潜み、男の体を引き裂いて出て来ようとしているように見えた。そしてすぐに男の顔は裂け、その裂け目からたくさんの触覚を生やした蝦が頭を出して来た。

「聞いていますか」

テーブルの向かい側には蝦ではなく男が座り、不審そうな目で私を見ていた。私は大丈夫だと答えたが、さっきの蝦がどこに姿を隠したのかあたりを見回さずにいられなかつた。蝦の触覚の一本すらあたりに落ちてはいなかつたが、店の中には確実に甲殻類の腐ったにおいが残っていた。



「私はある書評を読んで今ベストセラーになっているという本を買いました。先週の事です。家に帰って袋から取り出すとその本には題名も著者名もなく、その時嫌な予感はその本ですが、それでも読み始めてみると、案の定、本の中のすべてのページは真っ白でした。自分が間違えて白地のノートを買ってしまったのかとも考えました。しかし、本屋の新刊のコーナーに積んであったのは間違いありません。私に落ち度はなかったのです。途方にくれた私はその本をどうしたものかと婚約者に相談したのです。しかし、それは間違いでした。彼女は私の話を聞くと顔色を変え私を責めました。

「で、その本屋はもう告訴したんでしょうね。それより出版社の方が罪は重いわ。そっちもすぐに告訴しなさい。あ。作者も無罪だと思ったら大間違いよ。全員告訴だわ。思い知らせてやらなくちゃ。何してるの。すぐに裁判所と警察と出入版管理局に電話しなさいよ」

こんな女だとは知りませんでした。彼女の言葉に驚いて私は声が震えないようにゆっくりとでしたが十カ所に電話をかけました。そして、二十の窓口に電報を打ち、七十の役所の所長宛に書類を揃えなくてはなりません。今もまだその申請手続きの途中です。仕事はとっくにやめてしまいました。仕事などしている時間はないのです。こういったすべての被害について私は著者と出版社と書店を告訴しようとしているのです」

気がつくとも男の不幸の原因が自分にあるような気がして思わずすみませんと言いたいのだが、著者名も題名も本文もないその本の著者が私であるかどうかは誰にも分からないのではないだろうか。それが一冊だけそうなのだとすれば題名も著者名も本文もあるその本を確かめることで出版社も著者も分かるかもしれないが、どの本も皆そんなふうで題名も著者名も本文もないのだとすると、それはもはや著者も出版社もない本だと考えるほうが合理的だとも思った。この男は何故それを本だと考えているのだろうか。すべてがそれを本だと思い込んでいるこの男の勘違いなのではないのだろうか。あるいは、この男の言っていることはすべてでたらめで、テーブルの上の本にしてももともとただのノートだったのであり、つまりは私を脅して金品を得ようという企みののだろうか。しかし、そのような本が私の本ではないことを知っている私に、そんな嘘をついていったい何を脅迫しようというのだろうか。

\*\*\*\*

「文体がないのです」

男は語り始めた。もし文体がないというのがその本のことであるなら、その本には文体どころか文章もありはしない。

「雨が降るたびに文章や文字は水分を吸収してふやけてしまうのでやがて輪郭を失い消えて

しまいます。海の近くでは海水に含まれる塩素のために文字が燃え始めることもあるのです。砂浜を揺らめかせる炎が海岸線に沿ってどこまでも続いているのを見たことがあります。文体とはそういうものです」

以前、文体について同じことを誰かが言っていたことを思い出し、すぐにそれがあの編集者の言葉だったことに気づいたが、いったい何の話をしているのかまでは思い出せなかった。

「だとすればそんなものは必要ない」

あるいは

「だとすればそれこそが定義だ」

編集者はそのように結論づけた。表面上は正反対に見えるのだけれど、実は同じことを言っているという場面はこの世の中にはとてもありふれていて、それが文体などという抽象的であいまいなものについての言及であればなおさらだ。とすれば、この男は見かけは違っていても本当はあの編集者が変装しているのかもしれない。最後は見破られたとしても、あれほど完璧に女装をしていたくらいだから、男に変装することなどいともたやすいはずだ。そう思って男の姿を見直せば、目鼻口顔の輪郭肌の色、体格も声も話し方も編集者と区別がつかない。これを別人だと主張するには何かでっち上げとでもいうような偽りの証拠が必要になるだろう。それにその服は昨日編集者が着ていた服と同じであり、それはまたその前に会った時に編集者が着ていた服と同じであり、考えてみればこの編集者がその服以外の服を着ていた記憶など一度もない。最初に会った日の別れ際に気づかれないように服の背中の方の下の方に小さくヘブライ語で書いた「さだめなきもの」の文字が常にその場所に見つけられた。一度気がついてしまうと、男が編集者以外の何者にも見えないので何故今までそれに気づかなかったのかはもう理解できなくなっている。

「君はわたしの担当編集者ではないのか」

質問の形式を取ってはいたが、ほとんど断言のような口調でそう言うと、男は勿論だと答えた。

「今まで誰だと思っていたのですか」

まるで私の方に非があるかのように言うのは編集者のいつもの言い方だった。

「誰でもない誰かだと思っていた」

私が正直にそう答えると、彼は少し失望したように俯き、私を見ずに原稿はできましたかと尋ねた。生まれつきいつも相手が一番嫌がる質問を思いつき、それを相手が一番嫌がる瞬間に口にするのがこの編集者だった。その観点で振り返ってみると、この男だけではなく関わりを持った編集者は皆そうだったので、おそらくそれは編集者という職業に必須の素質なのだろう。質問に私が不愉快そうな顔をしていると彼は少し饒舌になってこう言った。

「できていないんですね。あれだけ約束したのに」

約束など一度もしたことはないと言論すると、また愚かなことを言い始めたというような表情で約束というものがどういうものであるかを子供に分らせようとするかのように説明し、世間の常識ではセンセイは死んでも果たし切れないほどの約束をしまっているのであり、この先もしもセンセイが何らかの理由で亡くなったとしても、センセイは死後三十年間休みなく書き続けなければならないことになっていますと、センセイセンセイと私の目をみて馬鹿にしたように繰り返しながら説明した。

いつの間にか彼が何を話しているのか分からなくなっていた。編集者というものは作家に対して何を言おうと許されるものなのだろうか。それとも、この男が私に対する時だけこうなのだろうか。一度、他の作家にも聞いてみなくてはならない。親しくしている他の作家にも聞いてみることにしよう。しかし。

しかし、よく考えてみると、私は他の作家を一人も思い出すことができなかった。すでに十冊以上の本を上梓しそれなりに売れている作家である私が、他の作家に一度も会ったことがないなどということはあるはずなのだが、誰も思い出せない。そんなことがあるだろうか。

「当たり前です」

私のひとりごとに編集者が反応した。

「センセイの小説を読んだ作家であれば、だれもその小説を書いた人物に会いたいなどと思いません。いやむしろ、避けようとするでしょう」

私が傷ついていることを確認しようと彼は私の顔を覗き込んだが、私には彼の話の意味が分らなかった。私が理解できていないことに気づくと、彼は言った。

「センセイがご自分で考えているように、センセイの小説はつまらないと言うか読めば読むほど読みたいとは思えなくなるのです。他の小説家は、勿論そんな小説に興味はありませんから、会っても話すことはありません。さらに、そんなものを書く人間と話をして、自分も同じようにつまらないものしか書けなくなる危険をおかすわけがないのです」

どうしても尋ねなくてはならないと思った。

「わたしの小説が売れているというのは本当なのか」

「嘘です」

編集者は当たりのことだというように答えた。

「売れるわけがないでしょう。センセイは本など出していませんから」

「わたしが十冊以上本を出しているというのは嘘だったのか」

「もちろんです。ご自分でみたことがありますか。あの、表紙どころか、どのページにもなにも印刷されていない、本というよりもノートでしかないあれを、センセイは本だと思っていたのですか」

私は編集者の言葉が理解できなかった。あるいは、最初からすべてを理解していたのかもしれない。それから、あまりよく見たことのなかった編集者の顔をもう一度見つめた。なるほど、編集者の顔は私自身の顔だった。編集者だと思っていたのは鏡に映った私自身だった。